秋野七草考　全

二 14
2188

秋野七草考

二 14
2188

角田川
梅隠鞠塢居士撰

秋野七草考

宮商閣蔵版

明治三十六年四月七日 市島謙吉氏寄贈

二 14 2188

鞠塢居士亦一畸人也。嘗買地於葛陂芟藤蔓排荊棘築以竹。新開花園。廣袤凡數百弓。其中植以梅花一品無百株。一番風候漸々放香。次第抽葉開遍時節。望之則如縞雪襯之而雖彩氣不見。芳香滿園。隔塘射人。或疑似五丁之方。紫羅浮山以搬將來。又植之以秋卉七種數千根。七八月間無叢

美色之互映。閑適時節。望之則如彩雲霞而布。簇於不升一般哉。飄風。蝶舞蜂詠。或詩學壺公之術。縮玉蔵野以播將來。一條排萬株以為新春觀迎之幽境。一時変蘇幕以為清秋摩季之佳境。為浜合以為一園大偉觀之場矣。居士教緑蘿庵於其下。朝手斟搗汁。夕自煎皐盧以執花神之徳。嘗名梅花譜。近又名秋卉七種攷。秋卉七種。古昔萬葉縉紳家之所定也。後世或錯謬不明。於是執和歌者流及本草家。而質其名義。攷覈商搉。訂證可觀云。夫遷一園之勝景於百年。享兩浜之偉觀於一身。以為一世之清福焉。蓋不可不執其徳。又不得不詳其義也。居士何及于此。吁哉

千古時人矣哉。
壬申春王正月鵬斎主人亀田興敍

菱湖巻大任書

七草考序

哀角田河は武州東一の勝地にして。春乃花。秋の紅葉。月清宵。雪の朝は更ならいはんぞ。常にむかふに其眺望あく事なし。行水は底清くして其流いとあざやかに。上る舟も下す筏まで廣く繪に似たり。西には不盡雨降(アフリ)の山聳金。北にみゆる小筑波二荒の二峯をとほく。彼山ゝをうとして山雲にかくろひ。或はあるかなき。或は霞にこめて不のふりんやされ。あるひはくまなく晴まても見ゆる

万葉集
角田川
真字
伊勢物語
墨多川
○今は
隅田川
○墨水
澄多川

と難ずべくなども見らるゝされども、かくのみ新に
あることあらむが、かの杭こし西湖にもをさく劣る
ことなしと思ほゆ。此のうちにあるは、いとも志づかう
ある舊跡なりけり。古今集に在中将のいざ
こととはんといへるは、書まいふ所の隅田河、
すなはちこゝにして、菅原氏の女孝紀行にも、
あすだ河とよみ給ひ、今須田といへるはあやまりのよと
なまりなるべし。梅屋鞠宇がさうぞうとして雕まよ
ふけるの癖ありば、此角田河の堤をいてもさうだ

して蝸廬を結び、彼孤山の和靖が貧にならひ、
梅三百六十株をうゑて一樹を一日の用にあて、
みづからまれりとして一生清貧を楽しむがおもむきに
長流に及吸て茶を煮て窓のうちにて遊、
ゆふづゝ杖を曳て池のほとりに逍遥を、園中
四時の花あり、時として句なきぬことなし。籬乃
小草の芽え生るよりして、柳の落葉の霜下
埋まるまでいつとなくながめざるべき、梅の下陰にて
さらに其中鳴にはそ櫻かげまでに沈みたちまて

河骨が岸には芳宜山振が軒端には藤ぬるんで垣
根には菜卯花遣水には菖蒲かきつばた秋の
千ぐさはさらなりいふこともおろかなれば此外
萬葉集によめる草毛詩にいへる木数あまた
あつめおきて四時のめでてあそびともがらへし興
家の名を梅が屋と呼び園の名を百花園と云ひ
又の名を秋芳とも称せしにはありけれをりふ
つけて鳥虫すけり。なるは鶯まで。郭公ぐつひ啼
呼子鳥虫も蛙せみきりぐりす鈴むしまつ虫

まで集ておのがねぞあらそひければいかなるゆかりとし
いふをとどまりといふにはあらねど春の蝶も
園中第一の奇観とやいはん秋の七くさは園中
第二の好景とやいはん試花つくりの翁園中の
木草を子のごとく撫かしそだつるまことに古のくづ
木くさのことども考へ出せるのたのしさなく附
からぶみにもさらくさくの中よりわり出せる秋の
七くさの考がきも一書とはなりぬるなりぞもく
古の和歌よむ妻乃七くさにむかへそくはぞ

せはやうにしらる人もあめまどざるにはあら
ざるべし。我の七くさハすがらこつの書によりて
邪氣をはらふ爲のものなるが。秋のハ万葉
に載る山上の大人の歌よりいでゝ草の名をかぞ
へぞふまでなりて七草なれば。後の人これ七くさ
とならひまうけていひなしたり。さてこの嫁み寄。
花作の翁がさうしらふへあらぞ。まづく唐乃
大和の書どもと考へあはせてまれくにハこの
をきなが偉案をもちいはべりけん。花によくしるさる

捨人の道の禁にもがなとぞ物しき。新よすん
ありたるぞさへいへば花つくりの翁が草養ふ
いとなみのまさびわざなるをぞいとしきひがごとを
どもぞ綴るめるげ。ゆゑこんなりん。人々よくよく
まどしめてしよしくこゝろをわきへまへしかと
いふとかくなん。

文化九年三月

秋野七草考

葛飾　梅隠北野秋芳菊塢　撰
江戸　櫻下中村曉河　挍
江戸　筍齋闢禹麥　合

萬葉集第八

山上臣憶良詠秋野花歌二首

秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花　其一

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花

其二

波木　えき

万葉巻二　引馬野ににほふ榛原いりみだれ衣にほはせたびの
しるしに（此の外集中榛と書るところ多有り）契沖云榛ははりの木なりて俗に
はんの木といふ武士の氏に榛谷といふも是なり片山里の
川邊などに多き木なり昔は榛摺の衣とてよみ人も此の
皮をとりてそめたる也萩が花摺といふもある故に榛と萩と
よく見たるなり　真淵云ある人榛と書しは秋はぎをよめる次
今はんの木といふ木にてその皮子などとりて衣を染しがかくよみ
又秋花さくをば皆芽子とかき又寄木二寄榛二などの題にてある
歌をことに榛と書り云々　真淵考るに右はうたがへの理りをのこ
おもひてふかくたどらざりけり　先巻八に白菅の真野の榛原

心もしらぬ君が衣にぞする又古へに有けん人のもとめつゝ
衣に摺しけむ真野の榛原　巻十四（今三）にいざこどもやまとへ早く白菅の
真野の榛原手折てゆかん（此巻にも榛原とよめり）巻七（今十）に夏詠榛とてよみ
こが衣すらんににほひ乞嶋の榛原秋不立とも此外にも
あれど歌の意は總て秋はぎを何ぞといはで何處にも多くて
且なつかしからぬはんの木の枝を妹が爲に折て来んともおもほえず
巻七（今十）なるは夏にして秋ならずとも匂へと云は秋はぎならず
何かあらん此引馬野のはぎも花ならぬ頃に入てすらすとも衣に
色のにほひうつらんかは古へ人も有がまゝにこそ歌をよみ
され皮などの汁もて染てふ木の立よりとて即にほふはぎ

原とよめんや云く只此えぎに定むべき字なけれバ榛。芽子のこなりとぞ。令式などにハ蓁とも書けり仍て字にかゝはらで皆花さくえぎとすべきにこそ（榛と芽子とあやまりがちに分んとならば榛を木えぎ芽子を草えぎとやせん木えぎが本立ハ枯ずして春その木より若枝おひ古今集に古枝にさける花られハとよみ本あるのこえぎなどいひし是ハ草えぎを冬ハ茎も枯て春土よりもえ出めりされどそれまでをおしなべて字の書分しとハおぼえず上にいへる如くてあるべきなり）千蔭云榛ハ今の花さく萩なりと翁ハいへきと先人（枝直）説集中。芽子の歌百五十首餘有て皆花の咲散るとよみ雁廉又露などよみ合せたり榛と書るハ針。波里。など書るハ十首餘ありて皆花をよめるハなく雁廉露などよみ合せたるもなしされバ榛ハ今の萩にあらず波里と訓て今はむの木といふものなり此木の皮にてきぬをそむれバよくそまるものなりと古へ摺染にせしなるべし契沖が説によるべきよしいへり宣長の説ハしかり［衣服令］に蓁とあるもはりとよむべきはんの木なるよしやむごとなき御説もあれバいよゝ先人の説に違ふかへり［万葉考 攪落葉］にも榛を今の萩にあるゝよしくはしくあげつらへり［和訓栞］曰［日本紀］にハ榛字蓁字など通用してはりともはんの木とも訓ぜり蓁も榛に同じ潘岳詩に荊棘成榛といへバはりハ針の義なるべしよりて［万葉集］針原とも書せりはんざなるハりの木の略なるべしかちえだといふハ木萩の義今きえだといへり［万葉集］に真榛といふ物にして顯昭の大

萩といへるも同じ云く同種に夏萩あり花の時をもつて名づく白花あり飛入ありされば体源抄にいふごとく木類あり草類ありてそのうたきされば万葉集に木類にて榛をかり草類には芽子と書せるにや奥州の宮城野信濃の山路などにハいと大いなる木もありて弓などにも作るといへり梢に青き枝生て花さく故に宮城野の本あらの萩ともよめり本のあらいなる意なりと云又年毎に刈て若ええ出るが生ひ出るに高く一丈余りも打みだれて花咲なり上有といへり宗祇旅日記に本あらのさくらともよめりされば春刈のこしたる去年の古枝に咲るをいふと聞置ぬに宮城野まれ

榛（ハシバミ）榿（ハンノキ）花ハ松の花に似たり冬花咲夏末秋の初子を結ぶ実乃形丸し

あるにありとあるといふ里有て名なども外にハ殊なる萩のありし枝ごしすべての萩よりもうるハしくあるべしなりといへり又曰榛は今のはりの木ともはんの木ともいひて染家の用に入る物なり諸國の田間に多く殖よりかを花の賞をべき木ともあらず歌人の詠むべき品ともみえねど日本紀の蓁摺衣万葉集の榛原手折てゆんと有衣にすらんとも衣にほれせともよめる物にハあらじされど和名抄の郡名郷名所にもあまたさばんえく蓁原をはりはらとよみ榛澤をばはんさハとよめれバ此物を指にや杜子美が榿林礙日吟風葉と作れるもの是なりといへり南都にせぢいといふ

此実を尾張に山どんことゝいふ漆家に用ふ又曰【史貨殖傳】千樹萩の注に萩は梓木なりとあれバ二合字の意にて はぎと訓ぜしにや菅清公【尾州記】にも萩田を秦木田と書せしなり【壒嚢抄】にはえんえよりかきバ古へより漢名さだかならずしてとかく左に記せし如くさの漢名をもいふ

【救荒本草】胡枝子俗亦名随軍茶生平澤中有二種葉形有大小大葉者類黒豆葉小葉者莖類蓍艸葉似苜蓿葉而長大花色有紫白結子如粟粒大氣味與槐相類性温

【花史】觀音菊天竺花是也五月開至七月花頭細小其色純紫葉如嫩柳其幹之長與人等

【和漢三才圖會】天竺花如言于花史案枝葉長鋸蔽地狀似絲櫻而一椏三葉其葉似棗葉又似南天燭秧而不尖柔軟秋著小花淡紫色俗專用萩字奥州宮城野方二十里許萩生茂有山萩有白花者有白紫開分者

【和名抄】鹿鳴草【爾雅集注】云萩一名蕭 萩音秋一音蕉 蕭音霄 和名波木今案牧名用萩字萩倉是也辨色立成新撰萬葉集等用芽字唐音芽音胡誤反草名也國史用芳宜草三字揚氏漢語抄又用鹿鳴草三字並本文未詳

今按ずるに【史記】山居千樹章 註一本章作萩 又曰淮北常山已南河濟之間千樹萩云云 樂彦曰萩梓木也可以為轅者

【爾雅】萩蕭也 通 楸木名也 しかれば萩蕭楸ともにはぎと
梓木なり 志かるに萩をはぎと訓せしハはぎハ秋花さく
草なれば秋つくりしきとめてかり用ひたりといふ【琉球國史】
小萩の訓ありといへども是ハ周煌かの國へ使者に来りし
後に作れる書なれば琉球にても我國の文字に従ひたる紙
其まゝに書るものなるべし二下にてもとよりはぎを萩と書るにハ
あらじ

糸萩　花くまなるふして盛りひさしくたるを
もて名づく【久安百首 待賢門院安藝】風吹ばよその糸萩よる毎にはら
ぬく玉の露ぞ落ぬ　まさ糸よりかくとも【家集 能因法師】

錦にもおりつへきこのわが宿の糸よりかくる秋萩なれハ

このゝ萩　糸なきこえ【古今物名 よみ人しらず】うつ蝉のからハきごとにとゞむれ
どたまのゆくへを見ねぞかなしき

玉萩　玉もて花の清らなる紙ふもるなりまさ露乃おき
わたしたる紙のうへてゆふかゝ【夫木】かゞやくに月のひかりも
うつりける有明の庭の露の玉萩

もとあらの小萩　もとのあれたる本萩なり【古今】みやぎ
のゝもとあらの小萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて

萩の花つま　鹿のなくものゆゑに萩を鹿の妻としていへり
【寳治百首 蓮性】人ハこぬ草木の床乃露の上にかゝらしき孫なる萩が

花つま【枕冊子】曰萩はいと色ふかく枝たをやかに咲たるが
朝露にぬれてなよなよとひろごりふしたるさをしかのわきて
たちならすらんも心ことなり
萩が花摺　萩とかけば衣に色の移る故にいふ【月詣 覚聰】みやぎ
のはらあきの袖にもうつりけり衣きてへぬ萩が花ずり　まさ
萩の葉ずりのかり衣ともいへり萩の葉にて衣をそむるなり
のはりの色なるべきにや【夫木 後鳥羽院】露しげき萩の花摺乃
かり衣ぬれてもやさびのかたみにもせん
南京萩と称するは小の日光萩と称するに似もありて花観
べし築波萩と称するありめでたくもやさしく萩ともいふ

みだれ萩は大みだれなり別に草萩と称するもの一種あり又
仙臺萩と称するもの花黄にして豆の花に似たり紫は
其花の紫のごとくにして紫なり凡そ三月花さけりまた
一名野決明とも又一種合歓木のやうなるは紫なる萩
あり　ねぶれ萩にも此名あり古くは此萩をいふ
【八雲】しのぶ草【和名抄】鹿鳴草の字を用ゆ故に此名あるべし
【家集 教長】都にも咲白へども康のすく君にかゝ草ハ秋の山里
【同】月見草　同　野守草　此花もまた此野の花を野守
【莫傳 蔵玉】初見草　はなやかにて露も色ある初見草きのふの夏
草まのつらひ猶紙あれしつるこの頃

の萩とおもふに

[莫傳藏玉] 庭見草　かく花稀なる秋にかゝる庭見草を立よる

人のおとさよ　藏

[藏玉] 古枝草　宮木野や露も及ある古枝草こそしの秋も

花を咲なり [古今秋上 よみ人しらず] 秋をらの古枝に咲る花みれはもとの心は

わすれざりけり

[莫傳藏玉] 秋遅草　秋ちかきや花咲る此野にはとりしの麻をかり

ぬ斗に [莫傳藏玉] 濃染草　花さけは深き色人もこそあらまし人に

めぐりふたやまふらん　莫

[ありほ] さいたま [袖中抄] さいたまり初萩をいふさいたま前なり

もろ萩なり　云く

手波奈　をえな

薄の穂に出たる所ハ獣の尾に似たるもみな尾花と名

づくといへり真渊云をとれる男花なり [万葉集] に須々志

競とよめるを壮士どもの相いさそふをといひ祝詞に

伊須呂比てふも荒ぶる神達の競ひをといへり草の須々きも

物より高く茂りて雄々しくみゆるなればをばなと名づけ

かつ男花といふをとこをそれの花とあるも男花女郎

花をむかへるなり [仙覚抄] 曰 [万葉集] 云美草ハ薄と真渊

云美草ハ真草といふに同しくて秋の百草をいふと宣長

云義草ハをそれとよむべし　貞観儀式　大嘗祭條ニ次黒
酒十缶云々以義草飾之とミえ又延喜式にも同しくこゝ
然るがいかなれバ一種の草の名なり右ハをそれを義草と
書あらはせるなるべしといへり巻八巻十などにハ草をそれをも
をそれと訓ぜりをそれハ秋草の中にて尊まるゝもの
なれバなり

爾雅　曰薄草聚生曰薄又曰蒠ハ芒同　杜栄也
新撰字鏡　曰蘱生木曰榛草蘱生曰薄也
時珍曰芒葉皆如茅而大長四五尺甚快利傷人如鋒
又七月抽長莖開白花成穂如蘆葦花也

三才圖會　曰芒芑茅杜栄俗作薄字
和名抄　曰薄　新撰万葉集ニ和歌ニ花薄ハ波奈須々木今案即厚薄之薄字也見玉篇　辨色立成
云芊和名同上今案芊音千草盛也見唐韻
くさのをさひ　にいはく　契冲雑記　に云　赤染右衛門集　にあでし
この薄になりたる秋なれど　招ひのかれこやまでこの
花をさかせよ移ろふ人もゆきてみるべしこれハなでしこの
変じて薄になれる也又なでしことをそれのあるなる
和なでしこをそれすゝきになりしも我をよめる和なでと
の薄になりけるなるべしさめるなりと云々
今案にふでしこのをそれになりたるとハなでしこの

茂生しげる義にいふなるべし 長明四季物語 に放免乃
下人の袖たもとに結けるかくありく侍り のもとすゝき
なりしまれるどけしからぬさんすのなりと云々されも
百生瓢のしげくむらくとしげる義にいふべし又 西行集
によしの山風にすゝきにさく花もる人のをるさへをし
まれぬのはとよめり
摂津國風土記 云雄伴郡有夢野牡鹿語其嫡云今夜
夢吾背尓零於祁利止見支又日都須々木草生多利止云々このひと
すゝき草生たりといへるも一むらの草生なりとおもひしと云々
日本私記 に薦スヽキと訓む 字彙 草稠曰薦と云々是ホを合

考ふまへ一草の名の上にあらば草の茂まる義にて薄と
いふべし此草めとより叢生なる本にてすゝきと名付
たるべし云々 日本紀 蘆荻の字共にスヽキと訓ぜしも
いづれも茂生なるもの本にてよめるなるべし
白ゆふを花 白雲にまがふるそてたる之 大木 後九条内大臣 山もと
の野原にまじれるすゝきの白ゆふをたれ秋風ぞふく
をたれが波をたれが袖とのふるんとそいへり 不及證歌
糸薄 葉ふそくして糸のごとくなる故にて名づくまさ
穂を糸にたとへてよめり 續古今 太上天皇 いとすゝきこすゑにかゝる
極並てあまる家の玉乃をまぜんまさにむけの系とも

[新六帖 衣笠内大臣] 秋風にまよみだれぬ花薄ふもゆけの糸乃
ぬきあへぬまぞ ますほそごの糸とも [夫木 衣笠内大臣] 花薄
ますほそごの糸をよりかけて玉をまげぬく秋の山家
たゝ薄 [袖中抄] 曰花薄なれたとなと同じひとつこ [万葉裏書]
ふへたゝ薄と穂の出て旗をさゝげるやうなる薄といふ
とぞ徘徊中にあると云々 真渕云秋の野の中よそくれる
物より高く頭もそ茎も長くてたゞ有るれば幅もくれ
といふなるらん又皮の字を書るふよれバたゝさのさを濁りて
蘆の意とし穂を皮に含みて時に開出るなれバたゞ
ちくれといふらんともおぼゆ也 [万葉巻] 軽皇子宿于安騎

野時柿本朝臣人麻呂作歌 やすみしゝわが大君よろ
ひくの秋日のこゝ暑さをふに秋の大野にちまさゝくれ
しの秋おしすべ云々
いた薄 岩ねに生なる薄か [家隆家集] 吉野川一本なる
いた薄狗ふる人の袖かとぞみる
はしこのきるちふの薄 白くまぶしある薄といふ
羅紋とも鷺の羽もくれともいふ [類題] かり人もさえ
ぬ野も原に着鷺のきるふのもくれ誰まねくらん
くろふの薄 くれさかんある薄をいふまゝ焼野の
薄なりともいへり

志ま薄　たてよこに文ある故にいふ

魁薄（おほすゝき）　快利而傷人如鋒刃是をいふ也　以上證歌未考

ゆとあしの薄　ゆとあしの萩に同じ　夫木　大納言資季

よび人のこふしむ野べの秋風にゆとあしのすゝき

穂こそ出まて

このれすゝき　かれよ枯薄といふ　新六帖　衣笠内大臣　嵐ふく

竹のまろれの枯薄そよく淋し有明の月

志のすゝき　志のゝを薄とも　万葉巻七　いなゝと

我かよひぢの細竹為酢す我しかくらでなびけ細竹

原是も小竹なり此歌よそくこれぞ志のすゝきといふ

これも一種の名にはあらで小竹の叢生したるを

志のすゝきといふ　下になびけ細竹原とことわり

たるにあれるなり

篠目莫傳　露曽草　わが宿の庭におしなき露曽草かさ

よるはかり風や吹らん

莫傳　數波草　みいはす風こそふきよそ波へだて數

波草に露ぞこぼるゝ

莫傳　みだれ草　藻塩　袖波草　是ハ尾花こと云ゝ

袖ふり草　隣女集　に焼野雉　やけ残るかやの原をつけ

行べ袖ふり草にきてをみしる　焼残るうちのちゝろ

村すゝきのむ陰にやさてまちあくらんといふ歌よみあそび
出せり袖なり葉は薄なり

すゞろの薄　春ぞけふる薄之すゞろは黒(くろ)なるべし

後拾遺　堀川百首　曽丹集　等にこゝえる又すゞろとも
をそぐろともよめりめとは　万葉巻八　に　春日之開乃手
為里とある誤字(あやまり)をそのまゝによみし也

まそをの薄　伊勢之記　長明　日をへつゝまそをの花落
たわとゆふべに人まねくらし

ますをの薄　伊勢之記　長明　自(ろ)妙(之)のますをの糸をくり
さゝしまうちふさゝれ花のをきさき

まそほの薄　伊勢之記　長明　秋はてゝ霜より後の菊の色を
華くまそほのと花なぞへる

長明無名抄　曰雨のふりける日或人のもとにおもふどちさし
集(あつま)りて古きことなど語出けるついで(序)にまそほの薄といふ
ことをいひける薄ぞなどいひしろふ中に或老人のいはく
わたのべといふところにこそこの事しりたるひじりはありと
きゝ待りしとかのくいひ出たりけり登蓮(とうれん)法師(ほうし)その
中にありてこの事をきゝて詞(ことば)すくなくて又とふこともなく
あるじ(すゞ)にみのかさかしたべかし給へといひければあやしと
おもひながらとりて出しけり物語(ものがたり)をもきゝさしてその乃

うちきこえぐさしたれて急出たる人くあやし
がりてその衣をふりこのべにより来てそし頃いぶかしく
おもひまへしる人もこれる人ありときこえていそぎ尋ね
まゐらざらんといふ朧ならながらさるにても雨やめて出
なへといさかけまどいでたるなれてと人も宣ひける哉
今はわれも人も雨のたれ間などまちもの人何なるも
静にと斗いひそへいふなりいこえ方なるすゝ物
なりしさそほんのごくたびあひとくとひ咲ていそぐ
秘蔵しけ里志のるゝ木三代の君子にてつたへすくひとく
侍るも此譜同じ様にてあれと侍るもまゝ本の譜と

いふそ本長くて一尺たらずある紙にかのまゝて鏡とい万
葉集に十寸の鏡とかけるふるくもまへしまそさのきそみと
いふも真麻の意と見え俊頼朝臣の歌にもぞよみて侍る
ますさの糸をくりかけてと侍りとよ糸などのこぼれたる
をかるもますさの譜とも識にまゐらせとりふるなり
まゐらせの譜といふべき紙詞を略しけるも色深き譜乃
みゆくなへきこえけるも古集などに憶にみえたるにあれ
ど和歌のならひならのあるにも紙めちふかるも又世の
のさるなり人善くきこしぞ妄にとくべからず

久須くず

蘇頌曰葛春生苗引藤蔓長一二丈紫色葉頗似楸葉而色小青云々

花鏡曰葛一名鹿藿産南方春初生苗引藤蔓長一二丈葉類楸青而少也七月開花紅紫色結莢纍々似豌豆形但不結實根形大如手臂紫黒色端午採根曝乾以入土深者為佳其藤皮可作絺綌惟廣中出者為最根可作粉能解酒病

和漢三才圖會曰其葉薄微似手楮葉而面青背白至風則能翻恰如反掌婆娑而作聲故稱歌人葛葉裏見譬人恨云々

和名抄曰葛 蘇敬本草注云葛穀一名鹿豆〈葛音割和名久須加豆良乃美〉葛實名也葛脰〈音豆和名久須加豆良乃美〉葛根入地五六寸名也

羣芳譜方士飛軒駐碧霞酒香風冷月初斜不知誰唱歸春曲落盡溪頭白葛花　杜少陵

葛の花を民家にて食用にするを藤豆に花も葉もよく似よりされど葛の花ハ藤豆よりも大なりふとくたれハ下より段々に咲登るゝ蕾のうちハ真のくまみあるにて中なるより藤豆の花にかはることなし　按するに藤豆と

いふ葛豆といふ義なり花も紫も似たるによりてその
名あるべし 古事記 に藤袴といふは葛袴なり又河内の
藤井寺を葛井寺ともかけるなり
古へ葛の皮をとりて布を織るきぬをふぢごろもといふ
万葉集 に 山田守翁が藤衣又須磨の海人の塩やき
きぬの藤ころもなどよめり 和名集 に縗衣をよめり
葛布をとりて素服とせる衣なり 古へきたなくしてさて
らましかるにや 拾遺集 服ぬぎ侍るとて 藤衣なくて
きつるなみだは河となしふもまさるみぞなかる
万代 元輔 風ふかみ秋たつそかさの葛の紫をうらこてつのこせ

ともふる哉
枕冊子 にいはく くずの風にふきかへされてうらのいと
しろくみゆるをかし
玉まく葛 紫紙まくをいふといへり 千載 定通 やききそし
ふるのをのの真葛原玉まく斗かになるこのれ
真くず 真まは称る辞なり 不及証歌
まくずが原 智恩院山門の南また叡山横川に
ありとぞ 葛のはひよるをいふべきにや 新古今 慈鎮 わが
恋は松をしぐれのそめかねてまくずがはらに風
さわぐなり

【莫傳】松無草 秋さきに花紫の松無草かゝる葉さへ玉とこそあれ蔓のしげくまとひかゝりて松もみえぬなりて松無がごとしといふ義なれ

奈天之古 なでしこ

【草花譜】曰瞿麥單瓣者名石竹千瓣者名洛陽花

陶弘景曰瞿麥子頗似麥子云々

時珍曰案陸鮮【韓氏外傳】云生于両旁謂瞿此麥之種旁生也

【爾雅】作遽有渠衢二音葉似地膚葉而尖小又似初生小竹葉而細窄其莖纖細有節高尺餘梢間生花田野生者花大如錢紅紫色人家栽者稍小而嫵媚有紅白粉紅紫赤斑爛數色結實如蒸麥内有小黒子

蘇頌曰苗高一尺以来葉大小青色根紫黒色形如細蔓菁花紅紫赤色至五月開七月結實

【花鏡】曰洛陽花一名遽麥葉似石竹叢生有節高一二尺花出杈枒本柔而繁五色俱備又有紅紫斑爛者植令苗頭無長短諸色間之開成片錦鏡有雅趣将開如巻旗以漸舒展嘗以正午開至晩則巻明日復舒頻摘去子則花開不絶有小黒子可種根亦可大約土肥根

潤則變色背開但枝蔓柔脆須用細竹扞扶之
石竹一名石菊又名繡竹枝葉如苕纖細而青翠夏開
花紅赤深紫數色千葉如剪茸結子細黒向陽喜肥毎
年起根分種方茂但枝條柔弱易至散漫須以小竹枝
扶之花開亦耐久而惜不香若能使霜雪侵其幹若漸
老亦可作盆景分枝扞插皆活

【本草和名】曰瞿麦 仁諝音衢陶景注云子頗似麦故以名之 一名巨句麦 揚玄操音九懼反 一名大菊 一名大蘭 根名紫葳 華名䕒 已上二名出踈文 和名奈天之古

【和名抄】曰【本草】云瞿麦一名大蘭 和名奈天之古 一云止古奈豆

【榮雅抄】曰花の姿あひさやかにらうたくしく色々咲べき
なれ名子にまよひて撫子と云なる盃久しけれど
常夏といへり唐なでしこ色々の品あり大和なでしこは
紅梅色なり云々
鷺なでしこといふ花のかたちによりて名とし鶉なでしこ云々
よりての名なるべし
からなでしこ かの国よりわたりしはめづらしく
【千載 和泉式部】見るに我此世の物に覚えぬはからなでしこの
花にぞありける
やまとなでしこ もとより我国にありしをいふかはなでしこ

ふるくへてやまとはいへり　古今　われのみやあはれとおもはんきりぎりす鳴夕かげのやまと撫子　万代 信頼　大和とも唐ともみえず山城のときはに咲るなでしこの花　万代 公任　敷嶋や大和にはあらぬなでしこの花をうへこそ世にふかりけれ　千首 肖柏　いかにともなれのきぬのうちの庭の面にやまともろこしの撫子の花

枕冊子　草の花は　なでしこからのはさらなりやまとのもいとめでたし

からなでしこ　まづ二葉なるをいへり　家集 忠岑　ふた葉あるはなでしこも哀なり幾その秋に逢んとすらん

いはほなでしこ　岩のかどにおひまさるなるべし　夫木 光明峯寺　ゆふ島やいはほなでしこあさえぞやどれ月さへうつろひにけり

大鏡裏書　曰淑殿大后少之時容姿絶麗号瞿麦御取美艶耳今瞿麦稱常夏蓋避諱也　今大鏡裏書をみるにみゆるとおぼえなし

餘材抄　云瞿麦をなでしことはいふ本名なりとこなつといふも異名なり云々　常なつとは此花夏秋冬三時にさける花に総名をわく常夏といふ常の義なり　万葉　立山の雲をよめれば君家にきこえたると云々　とこ夏といふよりあつさぞまさるとよめり

【六帖 貫之】なでしやと手村こふ立よればあつさぞまさる
とこなつの花　まさきを床にさりみして【古今 躬恒】塵を
だにすゑじとぞおもふさきしよりいもとわがぬる
床夏の花

【日華本草】曰瞿麥謂之石竹
【酉陽雜俎】曰蜀中石竹有碧花
【三才圖會】曰瞿麥即石竹也今以為二一種共葩周圍有
刻齒而有切叉似剪紅紗者為瞿麥無切叉者為石竹
【廣群芳譜 張文潛】眞竹乃不花爾獨艷暮春何妨兒女眼謂爾
勝霜筠世無王子猷豈有知竹人粲粲好自持時來稱

此君
【万葉】石竹をなでしことよめり一物なるうたがひなし
石のとこともよめり【家集 俊頼】君が代のためしにひかん
長月野のいしなかにも花咲にけり
【藻塩草】曰昔ある所に鳥田の時主といふ勇士ありけるが
家のうしろの山に一の石ありかの石せんきありて人を
なやまし仍て時主件の石を射るにそれたち矢たち
ぬけずして花さき畢ぬば此花なでしことなり花のさかりなりて
さくとなり

金のぜに　今の銭は金銭花にやと覚ゆれど瞿麥に

よめり 〔夫木 源仲正〕 むらひあけぬ蘆が下にかくせども
こら緑の露の花をみつまぞ
〔藻鹽草〕 日くらしくさ
〔莫傳〕 かさゝ草 昔大和國に人のこすのなでしこをつくりて
かるに其後死して親我子のつくりしなでしこを見て
是をやすめりと云 さてこれよりなでしこを人のかたみ草といく
とひけるは袖ぬらさん 〔夫木 躬恒〕 なでしこの花さきぬ
かりなれ人の戀しき時のよそへかたみ草
〔篠目〕 なつかし草 ふる郷とおもひなぞなく夏ことに
なつかしくさの袖のくまなる

乎美那閉之 をみなへし
蘇恭曰敗醬多生岡嶺間葉似水莨及薇銜叢生黄花根紫作陳醬色
時珍曰敗醬初生葉布地似松菜葉而狹長有鋸歯是秋莖高二三尺而柔弱數寸節節間生葉四散如繖顛頂開白花成簇如芹花蛇床子花
〔大和本草〕曰敗醬〔本草〕ニ載ル所蘇恭カ説ハ花黄ナリ時珍カ説ハ花白シト云其形状ハ倭俗ノ所謂女郎花ナリ本邦ニモ黄白二色アリ

醫学入門ニ花黄ナリ古歌ニヨミ國朝ノ詩人ノ詠セシハ黄花ナリ

宗砌法師カ藻塩草ニ白花ナルヲ俗ニヲトコヘシト云又オホトチハ女郎花ニ似テ花白キヲヲトコヘシ

ヨミナノ花ヲイヘリ敗醤ト名ケシハ此花葉ノ臭醤ノ損シタルカ如シト本草ニイヘリ今試ムルニシカリ

和漢三才圖會曰女陪之生山麓高二三尺茎有稜理而似蒿之茎枝兩々對生節間生葉其葉似三七及前故葉而細長七月出穂開花最細小正黄色可愛

本朝文粋源順詩曰花色如蒸粟俗呼為女郎者是也

随結子花白者名男倍之

和名抄曰女郎花

新撰万葉集云女郎花倭歌云女倍芝乎美那閉之今案花如蒸粟也出所未詳又曰敗醤和名知女久佐氣似敗豆醤故以名之

本草和名曰敗醤和名於保都知一名知女久佐

新撰字鏡蓀於保度知

和名抄茶於保都知

万葉小。娜子部四。姫押。佳人部為。美人部師。女倍之等。を何きもとミなへしと訓ぜり総て歌にハ女によそへてよめり

和歌題林抄曰家の結つるハ滲りと疑ひ志をれふをれかの

さかりとおもふ風にたはまて露にみだるゝとも縫なし
靡きしなやる花の枕とかひ男山にさける人の庭に
立るもうし我たゞ以んおさし野にあさなる契り結び
いそしき野に露のぬれ衣をやきるなどよむべし

古今 遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし
花も一時　こまハ花の盛をおもふべしの契なるをなまめき
きてをもをあはそひたてるがかしがましき世
掬さかりなく人をいましむるなり　同序にし
女郎花乃一時をくねるとあれもおもふべし乃
狭に盛のすぎたるをなげくなりと解すべし

女の本性をいふ

古今 遍昭

名にめでゝをれるばかりぞをみなへしわれおちにき
なと人にかたるな

夫木 中務卿法親王

玉だれのこすの大野のをみなへしふ
薄粟の色にさくらん　こすハ越とおやまれるなり

藏玉 草傳

おもひくさ　誰がをるさがの原のおもひ草我
なれがほに花を咲とも　藏玉 云女郎花をおもひ草と
いふとぞ　齋院 せんさい草畫 ふたえより天智天皇 草花

異名

をみな薄といへり　又紫苑とも不分明　但し女郎
花をおもひ草といふとぞ前栽合に定めらるゝ条勿論

漢名蘭
和名藤袴二種あり香ひて花の時香ひ枯葉ハ一ありていつくしんぜしくある是を真蘭と云別ハ漢和ともに蘭と称く水仙ハ似るものハ花も香あり餘ハ香なし幽蘭と云こんきべろくぞ

るり又摘とも能因法師ハよめりと云く

布知波賀萬　ふちばかま

路史　帝堯之世有金道種蘭

周易繫辭　同心之言其臭如蘭

禮記内則　婦人或賜之茝蘭則受而獻諸舅姑

左傳　蘭有國香人服媚之

琴操　孔子返魯見隱谷之中香蘭獨茂歎曰夫蘭當為王者香今乃與衆草伍乃援琴作猗蘭操

家語　芝蘭生于深林不以無人而不芳

離騷　紉秋蘭以為佩又曰秋蘭兮青青綠葉兮紫莖

開寶本草　曰蘭草葉似馬蘭故名蘭草其葉有岐俗呼燕尾香

陳藏器　曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云澤蘭

盛弘之　荊州記　曰都梁有山下有水清淺其中生蘭草因名都梁香

時珍曰　陸璣詩疏　云鄭俗三月男女秉蘭于水際以自祓除蓋蘭以闌之蕳以間之其義一也

淮南子　曰男子種蘭美而不芳則蘭須女子種之女蘭之名或因乎此其葉似菊女子小兒喜佩之則女蘭孩

菊之名又或以此也古人蘭蕙皆稱香草如蕙陵香草都梁香草後人省之通呼為香草爾近世但知蘭花不知蘭草蘭草澤蘭一類二種也俱生水傍下濕處二月宿根生苗成叢紫莖素枝赤節緑葉々對節生有細歯但以莖圓節長而葉光有岐者為蘭草莖微方節短而葉有毛者為澤蘭嫩時並可𥿻而佩之八九月漸老高者三四尺開花成穂如雞蘇花紅白色中有細子

楚辞 紉秋蘭以為佩

西京雜記 載漢時池苑種蘭以降神或雜粉藏衣書中辟蠹者皆此二蘭也今呉人蒔之呼為香草又或云家蒔者為蘭草野生者為澤蘭亦通

本草蘭正誤 時珍曰近世所謂蘭花非古之蘭草也蘭有數種蘭草澤蘭生水傍山蘭即蘭草之生山中者蘭花亦生山中與三蘭迥別葉如麥門冬而春花葉如菅茅而秋花黄山谷所謂一幹一花為蘭一幹數花為蕙者蓋因不識蘭草蕙草遂以蘭花強生分別也蘭草與澤蘭同類故陸機言蘭似澤蘭但廣而長節

離騒 言其綠葉紫莖素枝可紉可佩可藉可膏可浴言士女秉蘭

唐部風俗通 言尚書奏事懐香握蘭
言諸侯贄薫太夫贄蘭
漢書 言蘭以香自焼也若夫蘭花有葉無枝可玩而不可紉佩藉浴秉握膏焚故朱子 離騒辨證 言古之香草必花葉俱香而燥濕不變故可刈佩今之蘭蕙但花香而葉乃無氣質弱易萎不可刈佩
陳齋閑覧 言今人所種如麦門冬者名幽蘭非真蘭也
和漢三才圖會 曰藤袴高二三尺葉似女郎花而無切又六七月開細白花似繍線花些與儀邊草一類二種乎云々是則時珍曰蘭草澤蘭一類二種者乎

花彙 云不老草又類草ニ山蘭ト云有コンズベカラズ
大和本草 曰真蘭和名藤袴又アラヽキト云古歌ニラニトヨメリ 八雲御抄 ニモ蘭ヲフヂバカマト云ト書玉フ葉ハ麻ニ似テ两岐アリ香ヨシホシテイヨイヨカグハシ是真蘭ナリ野ニアリ秋紫白花ヲ開ク古歌ニ藤袴ヲ多クヨメリ云々若葉ハユビキテ食スベシ其芳香美味凡菜ニスグレタリ 詩経楚詞 ナトニ詠セシ蘭是ナリ今蘭ト云モノハ葉ハ大葉ノ麦門冬ノ如シ花ノ香ヨキ物ナリ 延喜式 三十二巻 園韓神祭春日祭雜給料蘭拾把トアリ本朝古モ此

真蘭ヲ用ヒシナルヘシ
禅僧圓月【東海一漚集】筑前神山移蘭記ニモ亦神山
ニ蘭多キ事ヲ記セリ是又真蘭也
【本草和名】曰蘭草一名水香一名煎澤草一名蘭香一
名都梁香草 已上三名出陶景注 一名蘭澤香草 出蘇敬注 一名蕙薫
和名布知波加末
【和名抄】曰蘭【兼名苑】云蘭一名蕙 蘭恵二音和名本草云布知波加万新撰
万葉集別用二藤袴二字一
【類聚国史】曰幸二神泉苑一琴歌間奏四位以上共挿二菊花一
于時皇太弟頌歌曰みな人のその香にめづるふぢ
はかま君のおほものたをりたるけふ上和之曰云く
菊をふぢばかまとよめるこの外にみえたれどおそらくは
菊も蘭の誤にあらぬ歟
【栄雅抄】曰漢書にある女野に行死たりけるが藤にそく
ありける袴をきて侍るその中より生出たりと云く
【和訓栞】曰花の色をもて藤と称し其瓣の筩をみせる
をもて袴と称せり
すべて歌にははかまによそへてたがぬぎかけしとも
ほころびるともよめりまた人のてのとよめるは
袴の幅に寄る詞なり

源氏物語 にあさがほ一つをふちたてまとひたるは楽天の詩に
老菊衰蘭三両叢といへるによりといへり
鄭文公の妾燕姫夢に蘭をあたへらるゝゆゑに子を
うめり生まれし子を蘭と名く後に穆公といひしとそこの
と 左傳 にみえたり

夫木 登蓮 ふちなみは藤さめの床に
かをりたり愛だたりとおもひしめの紙

あさくさ 允恭紀云壓乞戸母其蘭下莖卜云こ

阿佐加保 あさがほ

寇宗奭曰牽牛花ゝ乃木如鼓子花但碧色日出開日

西萎

蘇頌曰二月種子三月生苗作藤蔓繞籬墻高者或二
三丈其葉青有三尖角七月生花微紅帯碧色似鼓子
花而大八月結實外有白皮裹作毬内有子四五枚大
如蕎麥有三稜

和漢三才圖會 曰寅卯辰三時為盛向日光則萎再不
開而余荅開花乃一莖數十花逐日開不經旬皆結實
其花有深碧淺碧純白淺紅色四種一種有小牽牛花
高三四寸未延蔓不倚架二葉而開花亦美

和名抄 曰牽牛子 陶隠居本草注 云牽牛子 和名阿佐加保 此

出於田舎凡人取之牽牛易藥故以名之

誠齋集 楊万里 曉思歡欣晩思愁繞籬縈架太嬌柔木犀未發芙蓉落買斷西風恣意秋

和訓栞 曰朝顔の義なり朝とく花さくをもて名つくるとそ

新古今 山かつのかきほにさける朝かほはしのゝめならてあふよしもなし

新題抄 後水尾院 朝かほはあさねくにさかりひさしき花にそありける

朗詠 に槿をアサカホと訓せり

詩曰 有女同車顔如蕣花 注に蕣は木槿也樹如李其花朝生暮落

時珍曰此花朝開暮落故名日及曰槿曰蕣猶僅榮一瞬之義也

爾雅 云椵木槿櫬木槿郭璞注云別二名也或云白曰椵赤曰櫬齊魯謂之土葵言其美而多也 詩 云即此槿小木也其木如李其葉末尖而無椏歯其花小而艷或白或粉紅有單葉千葉者五月始開故 逸書月令 云仲夏之月木槿榮是也結實輕虚大如指頭秋深自裂

和漢三才圖會 曰總木槿花朝開日中不萎及暮凋落翌日不再開寔槿花一日之榮也其花僅一瞬故名蕣之説者非也自古相誤稱朝顔兵真朝顔牽牛花相當兵

牽牛子（あさがほ けにごし）今ハあさがほといへハ牽牛花にかぎる
べし花といへハ桜にかぎる昔ハ梅にてありしと云
槿（きん）むくげ あさがほ はちす 蕣（しゆん）同上 いにしへの歌書にも槿の文字にて
歌のさまも牽牛子によめり 牽牛子蔓草なり 槿花とハむくげの事なり
桔梗 【新撰字鏡】木部 上居頡反 下ハ柯杏反 加良久波又
云阿佐加保
【新撰字鏡】草部 桔梗 阿佐加保又云岡止々支
【新撰字鏡】ハ日本の古書にして唐の文字にある字よりも
あまたあれバ和国の古へよりの残りしものと云
【万葉集巻之二】朝顔ハあさ露おひて咲といへど夕かげに

萩の花ハ夕かげに咲まさるとの説あり又女の衣の夕かげに咲まさるとの古説信じがたし

こそ咲まさりけれ 此の歌牽牛花の夕に咲まさるといふ
ことあるべからず 槿花ハ木なり 木に草の名いふハ寛平
の比よりとぞされバむかしハ桔梗を詠せしにや碧色などの
夕ばえにおもしろし
朝のほどさかりにていつまでもさかりあかし七草の
うちなるハいつまで咲さかりにや牽牛花を後より
ことわりしものとあへり 槿花を小木なりといへども
木類にして七草のうちにハいりがたしされバ桔梗と
さだむべきにや此の外同名異物【和名抄】にも粗こんえ
より 芍薬 ヌミクスリ 枸杞 スミクスリ 今ハ俗牽牛花とのミいひて

槿花桔梗をあさがほといふゆゑなし
朝鮮(てうせん)あさがほハ曼陀羅(まんだら)花なり秋花さく花の形牽
牛花のごとくにて大なりこれもあさがほともいふ蔓なれ
ども今木あさがほとなづく木槿とまがふるとなれ
又異名山茄(なすび)とも唐人(たうじん)茄ともいふ
藏玉　志のめ草　牽牛花なり
莫傳　夕かげ草　牽牛花にハ似つかハしかれど夕かげに
こそ咲かざりけれとあるによりてむかしハ槿花桔梗を
いふなるべし
莫傳　かゞみ草　明(あけ)くれハちりけるあさがほの鏡(かゞみ)

草にもみえくもりなれ此歌あさがほを鏡草といふともそ
そこえをかゞみ草ハ物にてよく合しると学(おれ)ん　藻しほ草　に
かゞみのそれに生しる鏡草露之月ヲ影(かげ)うつれ清く
かゞみ草ハかゞみに似たる草なりおもて葉の石よそよそに
草なりといへり

槿花　ながみしと申これらのひらん夕のかけよ
きれあさりしるあさがほのたが那し　千蔭

桔梗　夕つゆにひもとく花をよそよそに
あさがほと名をおほせそめけん　春海

七草考終

梅か屋のあるじは七草考の中にあさかほを
今はきちかうなりとあらはして芳宜翁の
うたに七くさにあれうみやなまし中らぬ
きちかう花のきちかうの花とある紙にて
おもひいでよみておくりける

由都留

秋きりとなりしうつみもいまと残えれやゆふきちかうの花

鈴武笥書

秋の野なるのちくさをかりてよめるひとつなれと
かれ山のさふかしの花をおりて七草の
あはれさまるまにいとおもかるもみ所を
ならひかされさまいはしぬひてあしもとの
はつゆのはなの人の康の言も中にしく
ちりもすゆしとやしかりしみてしこの頃う
たきなるにそめしは風なもいとひなかりね
しそてる女郎花のえせなるはむくはきなよ

こゝろもわすられ日新をまちぬ歳の夜のわすれ
まるゝは人の世乃なかさもかこしれわたらふ故
かま倍てしとせれの袖乃まよひもぬしゆるし
まうちたる毎の露乃まなはしも萬かつゆのまれ乃
むらさきもたのゆかりかとくさくしよむらしくも
かつゝしもれと倍りて多くまへもしとかいなし
かゝ稀なもこの七草の野への花むしはさとよろふ
兎くなれ志かわかれとめく兄いはよしへと今と

おほなしかゝねもわらてこれの書かまへのたとこれ
なすまつもおはばれいかくしよふるひをほとしをせ
たいそひ梅かやのあるし名よみく春みに倍らる
ておしさくからやまとの君も堺もなきせゝのひと
しの論せしむみふもの殺さんまもおのかはひ
わうせし考へ城さへもめせられしそれいとこそ
くもかんをむるんともせられてかしはのまとし
本もとをたうくるひふゑはるゝましうれしさそ

4年 5月

いふもさらに今より後も世の人〱の見て
…のきぬのにほひも一すゝみ
…しあさきも海さらぬ人く
…この花はなきさとちる人
…こと跋かくしはべるかな
…り
平務廣、

いふもさらなり今より後も世の人々のかたりて
もてあそふ七くさの名のならひも一すさみ
ゆゑ都ばかりへいかにしあはれも深からぬ命く
海となす人その野辺の花の名くさをおほえん人
乃志るともこの事を拙かなしく書そへ侍る

文化九年二月　平　務廉